

本部試験地の鳥類相の季節変化

二村 一男

はじめに

前報¹⁾で、本部試験地の鳥類相を報告したが、今回はそれにひき続き鳥類相の季節変化について報告する。

京都大学構内は、創設以来96年におよぶ歴史のなかでクスノキやエノキの巨木をはじめ数多くの樹木が生育し、ここで活動をしている教職員や学生に緑のうらおいを与えている。本部試験地は京都大学の北部構内に位置し、真鍋ら²⁾が調査した京都大学の構内の植生調査によると、北部構内は最も樹木の本数、種数も多く、空間的にも余裕のある土地利用がされている。

市街地の中に島状に緑地帯を形成する本部試験地に生息する鳥類相の季節変化を調べることは緑地機能を把握する上で意義あることであろう。

報告に際して、鳥類の情報などに協力していただいた本部試験地の榎木達也氏、さらに常々御教示いただいている演習林の大畠誠一助教授に厚くお礼申し上げる。

調査地および調査方法

京都大学は京都市街地の北東部にあり、JR京都駅より7.1kmに位置する。本部試験地は大正13年に開設され、北部構内の北西部に位置している。標高は、56~63mで面積は1.29ヘクタールである。周辺は市街地に隣接し、すぐ南方には吉田山(120m)、東方には東山連山の如意ガ岳(459m)、四明岳(848m)があり、北西約1kmほど離れて「糺の森」で親しまれている下賀茂神社がある。年平均気温は14.8℃、年平均降水量は1,368mmで数年に一度積雪を見ることもある。試験地の周囲には樹木園が繁り、その内側が実験・研究用苗畑で、南側の入口付近には事務所、温室、材鑑標本館などがある。中央には小さい丸い池があり、全域は公園風に区画整備されている。樹木園に植栽されている主な樹種は、国内産のトドマツ、トウヒ、カラマツ、エノキ、クスノキ、ブナノキなどと外国産のテーダマツ、ハクショウ、センベルセコイア、ユリノキなどで、高木から低木の内外国産樹種は400種におよんでいる³⁾。本部試験地の北側は民家、西側は農学部附属京都農場(約2.48ha)の果樹園、水田、畑などが、東側は農学部のグラウンド、南側には農学部総合館がある。東南側には大正12年に開設された理学部植物園(約1.65ha)がある。この植物園は落葉広葉樹の高木(約100種、500本)⁴⁾が主体で全体がこんもりした森を形づくっている。植物園の西側には約200㎡の池がありヨシ、コオホネなどの水生植物が生育し、ときどきカ

Kazuo NIMURA

Seasonal changes of the avifauna in the Experimental Nursery on Campus of Kyoto University

モ類, サギ類, カワセミなどが採餌や休息にやってくる。

鳥類の確認, 生態観察には, 四季を通じ9倍の双眼鏡を使用し, 1980年から1981年までと1984年から1991年5月までの計8年間にわたり飛来, 生態を記録した。観察は主に昼間に行ったが, 1984年6月と1986年7月~9月には数回夜間観察も行った。留鳥は年間を通じ生息する種及び一般に留鳥といわれるもので本調査で観察期間の少ない種も留鳥と区分した。夏鳥は繁殖のため渡来する種, 冬鳥は越冬のために渡来する種, 旅鳥は春と秋の渡りの時期に一時的に滞在する種とし, そのほか一般には留鳥, 夏鳥, 冬鳥として区分できるものであるが観察例が1回だったものは旅鳥として区分した。

調査結果

本部試験地で観察された鳥類を示すと図-1のようになる。

本部試験地の鳥類相は, 24種の留鳥と3種の夏鳥, 16種の冬鳥, 14種の旅鳥で, この構成状況をパーセントによる四方形の図形で示し, さらにこれまでの各演習林及び試験地における観察記録を加えると図-2になる。本部試験地は, 上賀茂試験地とともに夏鳥のきわめて少ないことと, 冬鳥の割合が多いことに共通する特徴がある。留鳥, 冬鳥の割合は, 五地区の中で最も多く, 反対に夏鳥は北海道演習林標茶区に比べると1/10倍で, 上賀茂試験地の調査例とともに京都市域での夏鳥が少ないことが明らかになった。旅鳥は高緯度にある標茶区の11%が他の五地区の25~33%と比べて特に少ない。これは中緯度の本部試験地などは鳥類の渡りの途中であり, 位置的な特徴がみられる。里山である低山の上賀茂試験地と島状の緑地機能を有する本部試験地の鳥類の

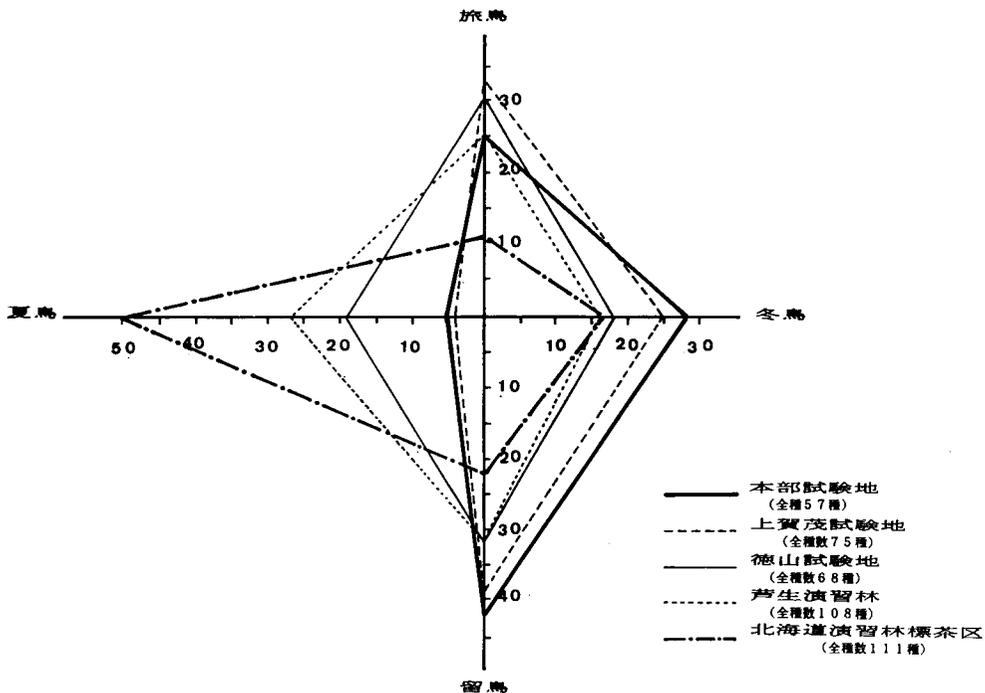


図-2 本部試験地, 上賀茂試験地, 徳山試験地, 北海道演習林標茶区, 芦生演習林における渡り鳥の割合の比較 (数字は%)

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
サギ	ミソゴイ					○								
	ゴイサギ													
ガンカモ	ミゴコ	○												
	アオサギ													
ワシタカ	マカ			○										
	ガルガモ			○										
ワシタカ	トツハ								○			○		
	ビミカ													
キジ	コジュケイ	○												
カモメ	ユリカモメ													
ハト	キジバト													●
ホトトギス	カッ					○					○			
	ツツ													
フクロウ	ホト													
	コウリス													◎
フクロウ	アオバズク													◎
カワセミ	カワセミ													
キツツキ	アオ		○											
	ゲラ													◎
ツバメ	コ													
	シアカツバメ													

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
セキレイ	キセ													●
	ハクセ												○	◎
	セグロセキレイ													◎
ヒヨドリ	ヒヨドリ													●
モズ	モズ													◎
レンジャク	キレン	○		○	○									
	ヒレン			○									○	
ヒタキ科	ルリ													
	ビタ													
	キミ	○			○									
ヒタキ科	ウグ				○	○								
	イス													
	サメ													
エナガ	エナガ													●
シジュウカラ	シジュウ													●
	カラ													●
メジロ	メジロ													●
ホオジロ	ホオ													
	シラ	○											○	

図-1-1 鳥類相の季節変化

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
ホオジロ	ア オ ジ	○												
ア ト リ	ア ト リ カワラヒワ				○							○		
	マ イ シ ヒカメ				○									
ハタオリドリ	ス ズ メ													◎
ムクドリ	ムクドリ													
	コムクドリ				○									
カラス	カケス													
	ハシボソガラス ハシブトガラス								○					◎

凡 例
 ○ 出現時期（1回のみ、および頻度の低い種類）
 ● 繁殖している種類
 ◎ 繁殖の可能性のある種類
 ——— 記録できた期間
 記録できなかったが生息が確実と思われる期間

図-1-2 鳥類相の季節変化

構成状態がやや似通っていることは興味深い。夏鳥は、上賀茂試験地と本部試験地とでは、種数はともに3種で、本部試験地のツバメとコシアカツバメは、周辺の住宅地などで繁殖している個体が採餌のために飛来するもので、その生息期間は、上賀茂試験地での4～7月に比べて、本部試験地では4～10月と長かった。

全種の年間の種数の季節変化をみると、最大になるのは4月で、この時期に留鳥の増加と渡り前の冬鳥、休息のために立ち寄る旅鳥が観察されるためである。このような増加傾向は秋の10月にもわずかに見られる。種数が減少するのは夏季の7、8、9月である（図3-A図）。留鳥は、サギ科、ハト科、キツキ科、ヒヨドリ科、エナガ科、シジュウカラ科、メジロ科、カラス科などの24種で、四季を通じ15種程度が生息し、なかでも通年出現する種は、ゴイサギ、コサギ、トビ、キジバト、コゲラ、ヒヨドリ、エナガ、シジュウカラ、メジロ、イカル、ハシボソガラスの11種で、ほかに一般に留鳥といわれているアオサギ、キセキレイ、セグロセキレイ、モズ、ウグイス、カワラヒワ、スズメ、ムクドリなどが観察された。コサギとゴイサギは隣接地の疎水や北西約1km離れた高野川と鴨川で生息しているものが、本部試験地の池や植物園の池に採餌、休息のため飛来するものであろう。冬鳥は、1月から4月までが7種程度で、9月下旬から12月にかけて3～9種である。そのうち、ルリビタキ、ジョウビタキ、ツグミ、ホオジロの4種が代表種である。夏鳥で、4月から10月まで主に観察されるのは、ツバメとコシアカツバメで周辺の住宅地で繁殖した個体などが調査地の上空を飛翔しながら採餌するものである。ほかに北部構内の植物園に渡来するアオバズクである。このように夏鳥がきわめて少ないのは小面積で孤立した都市緑地の特徴であろう。旅鳥は、4月から6月にかけて吉田山付近から植物園、本部試験地の緑地を通過する個体が観察され、その主なものは、カッコウ、ツツドリ、ヤブサメ、メボソムシクイ、センダイムシクイ、コサメビタキなどである。

図-3-B図はA図をパーセントで表示したものである。冬季は、留鳥と冬鳥から構成され、約56%が留鳥である。夏鳥は、4月から10月まで2～12%を占めるにすぎない。旅鳥は、2月、7月、9月、12月を除き8%程度が飛来する。

本部試験地で観察した鳥類を清棲⁵⁾による食性によって分けると図-4になる。一般に鳥類の食性は繁殖期とそれ以外では多少異なるが、主として採餌する餌をその種の食性とし、動物食性、

植物食性、雑食性に分けた。動物食の鳥類は3～5月に渡り途中の旅鳥や留鳥が多く約14種となり、夏季は8種前後まで少なくなる。年間の推移が全種の推移に似通っているのは、動物食の留鳥が多いためである。植物食は主に冬鳥で、夏季には3種まで低下する。雑食は主に留鳥で、5～8月にかけてやや少なくなるものの、通年10種程度が生息している。図-4のB図にはそれらをパーセントで表示した。この図から動物食の割合は4～8月には全体の約半数の40～60%で、その主体は留鳥と旅鳥で、8%程度の夏鳥が加わる。冬季の構成種は、1～3月と12月の植物食が39%前後で主に冬鳥である。雑食は、植物食と同様に1～3月と11～12月の冬季に多く、37%前後が留鳥である。このように本部試験地が温暖で、かつ冬季は鳥類にとって餌が豊富で越冬地に適していることがうかがえる。真鍋³⁾によると本部試験地内に約400種にのぼる多様な樹木が植栽され、さらに真鍋ら²⁾が調査した京都大学の構内植生調査によると、胸高直径30cm以上の大径木は7つのブロックのうちで本部試験地が含まれるブロックは、1ヘクタール当たりの立木密度が28本で最も多く、その半数が演習林と植物園に植栽されている。その主要樹種の中でもマツ属、クスノキ、エノキなどの果実は鳥類の重要な餌となっている。なかでも特に、ユリノキ²⁾は北部構内には、胸高直径30～40cmのものが10本あり、5月頃、チューリップの花の形をした花を咲かせる。この花の蜜を求めてヒヨドリ、メジロ、シジュウカラが終日やってくる。辻⁶⁾によれば、ユリノキは、花びらの付け根付近からたくさんの“花シロップ”を出し、このシロップが鳥類の好物のようである。また、冬にはヒヨドリとイカルが小群でこの実を食べにやってくる。

著者は、これまでに北海道演習林標茶

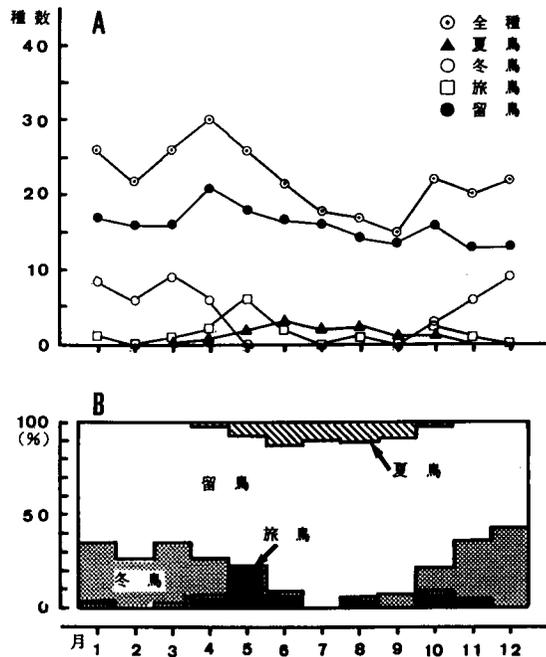


図-3 鳥類相の習性による季節変化

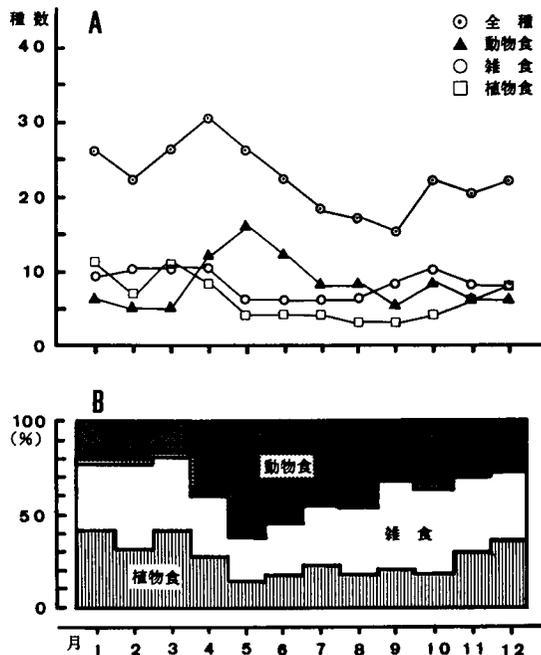


図-4 鳥類の食性により分類した季節変化

区⁷⁾、芦生演習林⁸⁾、徳山試験地⁹⁾および上賀茂試験地¹⁰⁾の鳥類相の季節変化を報告した。今回は、市街地の中に島状に緑地帯を形成する本部試験地の鳥類相の季節変化を調査し、既報と同様に鳥類相の季節変化を鳥類の習性と食性に分けパーセントで表示したものが図-3-B、図-4-Bである。夏鳥は、北海道⁷⁾、芦生⁸⁾、徳山⁹⁾、本部、上賀茂¹⁰⁾地区の順に少なくなる。冬鳥は、種類は異なってもその構成状態は、五地区ともほぼ同じである。旅鳥は、本部と上賀茂地区が似通っているものの、五地区の中では少ないのは、森林性と里山的の環境の違いによるためであろう。留鳥は、本州西部の本部、上賀茂地区の割合がやや多いものの、徳山地区、芦生地区とは似ており、北海道が特異である。本部地区の動物食の鳥類の季節変化は芦生地区と徳山地区が似通っている。雑食の鳥類は北方ほど多い傾向にあり、植物食の鳥類は暖地にゆくほど多くなる。これは冬鳥と留鳥の多さに関連があるように思われる。本部試験地に生息する鳥類の繁殖または繁殖の可能性のある種数と全種数の割合は21% (12種)で、標茶区の50% (56種)、芦生地区の47% (51種)、徳山地区の43% (29種)、上賀茂地区の27% (20種)と比べて最も小さかった。夏鳥が多く渡来する地区は繁殖する種数も多いようである。

山地から市街地に進出して、留鳥となった鳥類で本部試験地で生息している種は、キジバト、コゲラ、ヒヨドリ、シジュウカラ、メジロで、このうちキジバト、ヒヨドリ、シジュウカラ、メジロが繁殖している。とくにヒヨドリとメジロの古い巣をしばしば見かけるので、繁殖個体も多いと思われる。唐沢¹¹⁾は、森林性のヒヨドリが都市に進出してきた要因について、本種は食性の幅が広く、その幅を拡大させる柔軟性をもってしていると述べている。著者が、冬季に演習林本部の事務室のそばに餌台を設置して、それに飛来する鳥類を観察したところ、数羽のヒヨドリが独占し、シジュウカラやメジロが近くにやっても攻撃して寄せ付けずに採餌していた。このことは、ヒヨドリが食欲で体格が大きく優位に行動するためであろう。

本部試験地周辺では、2~3羽程度のハシボソガラスが周年生息しているが、この付近の苗畑、農場、果樹園、グラウンドなどの環境がハシボソガラスの好む低山の村落付近の開けた農耕地と似通っているためであろう。周年生息するハシボソガラスの個体数が少ないのは、演習林や試験地付近の北部構内は昼間の人の出入りが多く、加えてハシボソガラスの好む生ゴミがほとんど無いためであろう。ちなみに森林性のハシボソガラスは付近の山地からまれに漂行する個体が観察されたにすぎない。キジバトは山地では、比較的警戒心が強いが、本部試験地周辺では、人が接近しても平然と餌をついばんでいる。唐沢¹¹⁾は、「キジバトのドバト化」という表現をしている。ドバトは京都市内の社寺や鴨川べりに多く、ユリカモメに給餌する場所に、その餌を求めて数10羽の群れでよく集まっている。北部構内の農学部総合館(5階建)の最上階の隙間を10数羽が入りしているので繁殖の可能性も考えられる。

鳥が建造物の窓ガラスに衝突死することはよくあるが、これまで樹木に囲まれた本部試験地の事務室の窓ガラスに衝突死した個体は、ツツドリ、ツグミ、シロハラ、アトリの4例であった。また、著者が、これまで調べた上賀茂試験地でも、トラツグミが二度も林の中の標本館の窓ガラスに衝突死している。唐沢¹¹⁾は、東京都内の墨田区の高校で10年間でキビタキなど6種類の鳥類が校舎のガラスに激突し、すべて10月の渡りの季節に集中し、キビタキの8例はすべて若鳥であったと述べている。今回の調査で、アトリとツツドリは、春と秋の渡りの季節のもので唐沢¹¹⁾の例と共通している。北部構内は、5階建の農学部総合館をはじめ、多くの建物が点在するなかで、本部試験地以外にも多数の鳥類が窓ガラスに激突する被害に遭っているものと思われる。

以上の観察結果から植物、生物季節と鳥類の様子を季節ごとに整理すると下記のとおりである。

1. 春（3月・4月・5月）に観察された鳥

3月中旬すぎ、本部試験地や植物園周辺でイカルがよく鳴くようになり、ウグイスの初鳴きも聞かれる。見本園のツバキの花にはヒヨドリが吸蜜にやってくる。冬鳥のジョウビタキやヒレンジャクと少数のキレンジャクを観察することがある。ヒレンジャク、キレンジャクは冬鳥として渡来するが、その数は年によって増減があり、市街地でよく観察されるのは春季の渡りの時期で数羽から60羽程度の群れで公園や街路樹などのクロガネモチ、ネズミモチ、クスノキ、シャリンバイ、ピラカンサなどの果実をよく食べ、付近の電線や住宅のテレビアンテナで休息する風景がよく話題になる。農学部総合館東側に植えられているユリノキなどの落葉高木のこずえで休息する群れを観察することもある。

4月はじめ、ケヤキ、ユリノキ、エノキが開葉し、キセキレイが姿をみせ、ソメイヨシノの花にはヒヨドリが数羽で吸蜜にやってくる。中旬すぎには、グラウンドの周辺でツバメがよく飛びかい、トウグミの花にアゲハチョウが集まり、植物園の池にカワセミがときどき採餌にやってくる。また、巣材を運ぶエナガを見ることもある。隣接地の吉田山では渡り途中のヤブサメ、メボムシクイ、センダイムシクイなどがときどき観察できる。

5月はじめ、苗畑でアオスジアゲハ、クロアゲハを見かけるようになり、ユリノキの花には蜜を求めてヒヨドリ、メジロ、シジュウカラがよくやってくる。下旬には2～5羽のシジュウカラの若鳥を見かけるので、この付近で繁殖していると思われる。

2. 夏（6月・7月・8月）に観察された鳥

6月はじめ、本部試験地や植物園周辺の見本園は緑におおわれ、ハルゼミがよく鳴く。終日、ヒヨドリの鳴き声がさわがしくなり、数羽の若鳥をときどき見かける。夕方にアオバズクの鳴き声を聞くことがある。アオバズクは、5月のはじめ、京都市街地の社寺林に夏鳥として渡来し、なかでも京都御苑や下賀茂神社の「糺の森」は繁殖地として知られている。中旬には、グラウンド周辺でツバメとコシアカツバメの小群が飛び交い、市街地を通過するカッコウやホトトギスの鳴き声を聞くことがある。

7月中旬すぎ、ヒグラシ、アブラゼミ、クマゼミなどが鳴きはじめ、苗畑の池のほとりでシオカラトンボやナツアカネがみられ、夏のさかりとなり、鳥類の活動も目立たなくなるがサルスベリの花にはメジロが吸蜜にやってくる。

8月末、残暑の日が続き、ツクツクボウシが鳴きはじめる。

3. 秋から冬（9月・10月・11月・12月・1月・2月）に観察された鳥

9月中旬、苗畑のハギや植物園のヒガンバナの花が咲きはじめ、再び数羽のヒヨドリがさわがしく鳴くようになる。下旬、鴨川に京都の冬の風物詩になっている冬鳥のユリカモメが渡来する。

10月はじめ、「モズの高鳴き」が聞かれ、シジュウカラ、エナガ、メジロが10羽程度の混群で漂行する。10月25日頃になると、ジョウビタキが決まったように姿を見せる。たいてい雄を観察することが多い。下旬になると、イチョウ、ユリノキ、ハナミズキ、メタセコイアが黄葉し、苗畑や演習林付近で数羽のホオジロを見つけ、イカルの30羽程度の群れがエノキやムクノキの実に採餌にやってくる。

11月中旬から12月の初冬にかけて、ハクセキレイ、ルリビタキ、シロハラ、ツグミ、カシラダカなどの冬鳥を数羽見かけるようになる。

1月になると、数は少ないがミヤマホオジロ、アオジ、シメなどを時々見かける。農場の果樹

園には、ムクドリ20～100羽程度の群れが地上で採餌する。また、50～60羽のイカルが地上に落ちたユリノキの実を食べにやってくる。鴨川のユリカモメの数も増し、午後3時すぎ、琵琶湖の湖上の塹に移動する200～300羽の群れを演習林の上空で、ときどき見かけることがある。

2月下旬、シジュウカラのさえずりを聞くようになる。

ま と め

本部試験地で観察された鳥類は25科57種であった。留鳥が最も多く24種で全種の42%にあたり、その代表種は、ゴイサギ、コサギ、トビ、キジバト、コゲラ、ヒヨドリ、エナガ、シジュウカラ、メジロ、イカル、ハシボソガラスの11種であった。里山に隣接する上賀茂試験地と市街地の緑地帯として機能している本部試験地の鳥類の種構成が似通っていたことは、鳥類が両試験地とも周辺の低山と相互の行き来が可能であることによるものと思われる。本部試験地は緑地でありながら鳥類にとって里山的な要素が多分にあることによるためであろう。

本部試験地とその周辺の樹林や花木などに、四季を通じ飛来する鳥類は、われわれに潤いを与えてくれている。今後は特異な環境である島状の緑地における鳥類の季節別の種の優先度と出現頻度などの調査も必要となろう。

引 用 文 献

- 1) 二村一男(1993)本部試験地の鳥類相. 京大演集報. 25. 1～10
- 2) 真鍋逸平・安藤 信・川那辺三郎(1991)京都大学構内植生調査Ⅰ—大径木の樹種構成と管理状況の構内ブロック間の比較—. 京大演集報. 21. 65～77
- 3) 真鍋逸平(1990)本部試験地の樹木目録. 京大演集報. 20. 68～87
- 4) Isao Hatakeyama・Gen Murata・Hideo Tabata (1973) A List of Plants in the Botanical Garden of Kyoto University and Some Ecological Data. Reprinted from the Memoirs of the Faculty of Science, Kyoto University Series of Biology, Vol. VI, No. 2
- 5) 清棲幸保(1966)野鳥の事典. 東京堂出版. 東京. pp413
- 6) 辻 伸夫(1992)花シロップの不思議. 私たちの自然. 日本鳥類保護連盟. No. 68. 21
- 7) 二村一男(1988)北海道演習林の鳥類相の季節変化について. 京大演集報. 18. 1～13
- 8) — (1989)芦生演習林の鳥類相の季節変化. 京大演集報. 19. 1～16
- 9) — (1990)徳山試験地の鳥類相の季節変化. 京大演集報. 20. 1～9
- 10) — (1992)上賀茂試験地の鳥類相の季節変化. 京大演集報. 23. 1～9
- 11) 唐沢孝一(1987)マン・ウオッチングする都会の鳥たち. 草思社. 東京. pp261